

厚生科学研究
(子ども家庭総合研究事業)

清水凡生

幼児期における基本的情緒形成と
その障害に関する研究

平成12年度研究報告書

平成13年 3 月

主任研究者 清水凡生

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

目 次

総括研究報告書

1. 幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

呉大学看護学部 清 水 凡 生 …………… 151

分担研究報告書

2. 幼児期における情緒形成の基礎的研究

広島県立保健福祉短期大学 竹 中 和 子、下 見 千 恵

呉大学看護学部 片 山 美 香

呉大学看護学部 清 水 凡 生 …………… 153

3. 親の育児感情と乳幼児の感情認知との関連性について

恵泉女学園大学人間科学部 大 日 向 雅 美 …………… 160

4. 幼児期の自己制御機能の発達

和歌山大学教育学部 森 下 正 康 …………… 166

5. 正義感の発達を規定する家族要因の研究

埼玉大学教育学部 首 藤 敏 元 …………… 175

6. 乳幼児期の情緒形成不全の早期発見と治療的介入方法の研究

高知県立中央児童相談所 澤 田 敬 …………… 185

総合研究報告書 …………… 201

幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

主任研究者 清水 凡 生
(呉大学看護学部教授)

研究要旨 本研究は乳児期から幼児期におよぶ発達を視野におき、心の健全育成に資する成果を得るための研究として企画したものである。そのために心の発達に関係する保護者、幼稚園・保育園の保育者などによってもたらされる諸要因を分析し、それらの子どもへの影響を具体的に、縦断的に検討しながら育児、保育における心の健康作りのための施策を明らかにしようとするものである。今年度は全研究者が特に父親の育児における役割、父親への啓発の必要性について検討を行った。

その結果、①親と子どもの共感性、子どもへの受容的態度が子どもの社会的意識を高め、h先清野ある行動様式を規定する。②育児する母親の心の安定が、子どもの感情把握に必要で、ここには父親の子どもへの理解と、育児への支援が必要である。③育児における両親の性役割が特異的に存在する。④両親の育児不安を解消することが、育児における共感性、受容性を育てるのに有用である。⑤子育て支援における保育士の役割が育児している母親にとって極めて重要である。⑥子育て能力に関してリスクがあると思われる親の早期発見と、早期介入が非常に有効である。などが明らかにされた。

分担研究者 大日向雅美(恵泉女学園大学人文学部教授)、森下正康(和歌山大学教育学部教授)、首藤敏元(埼玉大学教育学部助教授)、澤田敬(高知県立中央児童相談所医務主任)

研究協力者 竹中和子(広島県立保健福祉短期大学講師)、下見千恵(広島県立保健福祉短期大学助手)、片山美香(呉大学看護学部講師)

■ はじめに

本研究は乳児期から幼児期におよぶ発達を視野におき、心の健全育成に資する成果を得るための研究として企画したものである。そのために心の発達に関係する保護者、幼稚園・保育園の保育者などによってもたらされる諸要因の分析を年齢の経過にしたがって行い、それらの子どもへの影響を具体的に、縦断的に検討しながら育児、保育における心の健康作りのための施策を明らかにしようとするものである。今年度は特に父親の関わり方、父親への支援のあり方などを視野に入れた研究を行った。

■ 幼児期における情緒形成の基礎的研究

乳幼児の気質的行動特徴と母親および父親の養育姿勢や育児意識等について新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を検討した。

「育児は楽しい」と感じている父親は、「育児に専

念したい」と思っており、「育児負担感」が低く、この場合、母親も「育児は大変」と思わない傾向にあり、その子どもの行動特徴は育てやすい子どもと認知されている傾向があった。

父親が「何にでもチャレンジする活発な子どもに育てたい」など特定の性格や能力を想定した育児方針をもっている場合には、母親の「育児負担感」を強め、「育児は楽しい」感を低くする傾向にあった。また、「じっくり一つのことをやりとげる子どもに育てたい」など普遍的育児感をもつ父親の子どもは、育てやすい子どもであることが多く、また母親の「育児負担感」が低かった。

本調査では子どもの行動特徴だけでなく、父親の養育姿勢や育児支援状況が、母親の育児の受けとめに影響することが明らかになった。したがって、父親の存在が重要となるが、看護者は単に父親の積極的育児参加を求めるだけでなく、母親の育児への受けとめや子どもの行動特徴をふまえた家族全体を合わせて行っていくことが必要と考える。

■ 親の育児感情と乳幼児の感情認知との関連性について

育児能力に関する父母間の比較を行う一環として、乳幼児の感情を把握する能力の相違を検討するとともに、その背景要因の一つとして育児感情の影響を検討した。

育児感情、および乳児の表情から感情を把握する

能力について、父母間の比較を行った結果、必ずしも明確な性差は認められなかった。

育児における充実感あるいは苛立ちや不安を尋ねた項目でも、父母の回答は傾向として類似性が高い。しかしながら、「できることなら育児は妻に任せたい」「子どもと気が合わないと感じることもある」等、育児からの距離感を大きくする回答も父親に顕著にみられた点である。

このように、育児感情の面では、一部に父母間の差異が示されてはいたものの、乳児の感情認知では殆ど性差が認められていない。むしろ、育児に不安や苛立ちの強い場合、父母ともに、乳児の感情認知が適切に行えず、やや意図的かつ否定的な要素が込められている傾向が認められた。

育児不安の解消が極めて重要であることが示された。

■ 幼児期の自己制御機能の発達

自己制御機能(自己抑制機能と自己表現機能)、思いやり、攻撃性の発達に母親、父親の養育態度のうち受容、と統制がいかに影響するかを検討した。そのうち有意な相関を示したもののみを述べると以下の通りである。

男児については、母親の受容と統制がともに高い場合自己主張が育ち母親の受容のみが高い場合思いやりが育つ。父親の受容が高く統制が低い場合思いやりが形成される。

女児については、母親の受容が低く、統制が高い場合自己抑制が発達せず、攻撃性が高くなる。父親の受容が高く統制が弱い場合自己抑制が発達する。また父親の受容が低く統制が高い場合思いやりが育たず、攻撃性が高くなる。

母親、父親両者の養育態度の組み合わせについて検討した。母親、父親ともに受容が低い場合女児の自己抑制が発達せず、男女児ともに強い攻撃性が形成される。母親の統制が強く、父親の統制が弱い場合男女児ともに攻撃性が強くなる。母親も父親も統制が弱い場合男児には自己表現が発達せず、女児では自己表現が発達する。母親の統制が弱く父親の統制が強い場合男児の思いやりが育たない。

母親、父親の男児、女児それぞれに及ぼす影響には、微妙な差があるが、いずれにしても親の受容的

態度が自己制御や思いやりを育て、攻撃性を抑制することが明らかとなった。

■ 思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究

子どもの正義感の発達を規定する家族要因として親の育児感情と育児信念の関連性を検討した。

育児不安の高い母親ほど、伝統的な家庭観・しつけ観を否定する傾向があった。父親では、伝統的な性役割のしつけ観が強いほど、育児充実感は高くなっていた。

家族要因として母子共感をとりあげ、幼児の対人的葛藤場面での対処傾向との関連を検討したところ、親子間での気持ちの交流が幼児の社会性の発達を規定することを示している。

対人葛藤に関する子どもの意識においても、母親の分離経験や意識は、男児の攻撃性や衝動的な抑制傾向を強め、女児の対人的抑制傾向を強めることになる。これらの結果は、子どもの愛着対象としての母親の養育態度の重要性を指摘している。

■ 乳幼児の情緒形成不全の早期発見方法の研究

全ての父母は、毎日のように子どもからかき回され、子育てで混乱を起こしている。その上父母に子育てとは直接関係ない他のトラブルが重なってくると子育てで混乱はひどくなり、虐待など子供に心の傷を与えるようになる。また乳幼児の心の傷に対しては、早期発見、早期治療が大切である。

産婦人科医院、保育園でリスク事例を「妊婦用1」、「妊婦用2」、「幼児用1」、「幼児用2」を用いてキャッチし、リスク親子に一次介入、二次介入、三次介入をした。乳幼児の心の傷の治療には甘え療法を行った。

調査票はリスク事例発見に非常に有効だと思われる。しかし使用する助産婦、保育士は乳幼児精神保健の知識を十分に身に付け、調査票の結果に繰られることなく、自分の感覚を大切にし上手に利用すべきである。リスク事例への対応は、その事例に合ったそれぞれに適合した介入をすべきで、集団での対応では本格的育児混乱の解決にはならない。なお、乳幼児の心の傷に対して、甘え療法が非常に有効であった。

幼児期における情緒形成の基礎的研究

研究協力者 竹 中 和 子、下 見 千 恵
 (広島県立保健福祉短期大学講師) (広島県立保健福祉短期大学助手)
 片 山 美 香
 (呉大学看護学部講師)
 主任研究者 清 水 凡 生
 (呉大学看護学部教授)

論文要旨 本研究は、新生児期(第1回調査)と乳児期前期(第2回調査)をふまえ、1歳時における子どもの行動特徴と、養育者がとらえている子どもの性格や育児意識、養育姿勢との関連について縦断的に調査検討し、支援の方向性を考察することを目的とした。本調査では、母親のみならず、父親への質問紙調査も実施し、25名の母親と18名の父親から回答を得た。その結果以下のことが明らかになった。(1)1歳時における子どもの行動特徴の両親による認知は、「反応性」の特徴以外は一致していた。しかしながら、「育て易さ」の受けとめ方や感じ方は、母親と父親で違っていた。(2)新生児期、乳児期前期、1歳時の子どもの行動特徴は、ほとんどの特徴が変化していた。ただ、新生児期の看護者による「生活リズム」の評定と1歳時における新しい環境への「適応性」に相関がみられ、1歳時では、依然身体・生理的側面に依存していることが予測される。(3)育児を「楽しみ」あるいは「楽しい」と感じている母親は1年後も楽しいと答えていたが、父親とは、有意な相関がみられず、必ずしも一致していない。(4)1歳時の母親と父親の育児意識・養育姿勢・育児行動は必ずしも一致していなかった。特に母親の「肯定的育児観」は、新生児期より一貫性があるが、父親のそれとは一致していなかった。(4)子どもの行動特徴は、父親の場合は育児への受けとめや養育姿勢に、母親の場合育児行動に反映していることが示唆された。さらに、母親が「育児は楽しい」と感じる度合いは、子どもの行動特徴ではなく、父親の養育姿勢「活発子育て観」に影響を受けていた。

■ はじめに

子どもは生後まもなくから有能で個性的であり^{1,2,3)}、単に養育者から影響を受けるだけではなく、子どもの様々な反応が養育者に影響を与えているということはよく知られつつある。新生児期における乳児行動特徴についてはブラゼルトンの新生児行動評価(NBAS)⁴⁾があるが、評価者が限られることや簡便でないことで普及しにくい。また、新生児期は外的環境への適応期間であるということで環境要因の影響を受けやすく、新生児ひとりひとりの個性をとらえるということは経験的レベルに留まっている。また、新生児期からの行動特徴がその後の人格形成にどうつながっていくかということについて縦断的、系統的に明らかにされた研究はない。特に、生後1年間については、親子関係を築くなかで基本的信頼感を獲得していく重要な時期にもかかわらず評価の方法が難しいこともあり明らかにされていない。

子どもの個性を豊かに育てていくことは、養育者にとっても、家族にとっても、そして社会にとっても一つの大きな目標である。しかしながら、実践するのは容易ではない。私たちは、いつ頃から、どのようにして子どもの個性をとらえているのであろうか。果たして、真にひとりひとりの個性を受け止め

て大切に育てているであろうか。そのためには、養育者自身がより育児の喜びや人生の幸せを経験することも必要であろう。

養育者は相互作用を通して乳児の行動から特徴を認知し、その子どもの性格としてイメージしていくと考えられる。養育者の「この子はこんな性格」という受けとめは、育児姿勢、育児行動に反映して相互作用が展開していく。乳幼児行動特徴は、1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月時で一貫していたという研究結果⁵⁾もあるが、さまざまな要因で変化しているという報告⁶⁾もある。また、養育者の「どのような子どもに育てたいか」という養育姿勢は、養育者自身のパーソナリティや育児経験、家族関係等を基盤としているが、日々の相互作用を通して変容していく。つまり、養育者はそれぞれ養育姿勢をもって育児に臨み、子どもの情緒発達や人格形成に大きな影響を与えているが、必ずしも養育者の思惑通りにはならず、子どもの個性に影響され変化していくと考えられる。

そこで本研究では、生後1年を中心に、両親がとらえている子どもの行動特徴と育児意識、養育姿勢、育児行動の関連について検討する。さらに、親、特に母親のニーズや育児環境における課題を明らかにし親子の関係性づくりを支援するための基礎的資料を得ることを目的とする。

■ 用語の操作的定義

養育者:ここでは両親をさし、看護者は含めないものとする。

行動特徴:特に乳児および年少幼児の場合に気質や性格特性に対応するものとする。

育児意識:育児に対する考え方とする。

養育姿勢:「どんな子どもに育てたいか」という養育者の思いや態度とする。

育児行動:養育者が子どもと関わる行動とする。

■ 研究方法

1. 調査対象

第2回調査(平成11年度)で調査協力の同意が得られた母親および父親33組。

2. 調査期間

2000年4月～2000年9月(回答時の子どもの平均月齢は13.4ヶ月, SD=1.12)

調査手続き:第2回の調査で調査協力の同意の得られた33名の母親と父親に、質問紙を郵送し、25名の母親(回収率75.8%)と18名の父親(回収率54.5%)からの回答が得られた。なお本研究は縦断的研究であることから記名方式をとったため、特に個人情報の守秘に努めた。

3. 質問紙

第1回、第2回調査と同様、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の5段階で回答する形式で、質問項目は成長・発達段階を考慮して追加、修正した。また、母親と父親の質問項目は対応した内容とした。本論文では、子どもの行動特徴と両親の育児意識、養育姿勢、育児行動について示し、検討する。

4. 分析方法

5段階尺度で回答をもとめた各項目は、「非常にあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「全くあてはまらない」を1点として分析し、関連を検討する。なお、分析には統計パッケージ「SPSS」を使用した。

■ 結果および考察

1. 子どもの行動特徴について

1)1歳時における養育者による子どもの行動特徴

の認知

因子分析の結果、 α 係数の.6以上の信頼性が得られた5つの因子を抽出した(表1)。発声や笑顔をよく見せ、応答的な反応特徴を「反応性」、睡眠・覚醒や生活リズムの安定性の特徴を「生活リズム」、人が手を出すのを嫌がったり、後追いで激しく泣いたり、ぐずりといった特徴を「扱いにくさ」、痾癩が少なく機嫌がよいといった特徴を「機嫌よさ」、新しい環境への慣れ易さの特徴を「適応性」と命名した(表1)。

母親と父親の認知する子どもの行動特徴の各 α 係数は、「反応性」が.41と低かったが、「生活リズム」「適応性」「機嫌よさ」がいずれも.75、「扱いにくさ」が.81と高かった。「反応性」以外の行動特徴については、両親の認知が一致しているといえる。「反応性」 α 係数が低かったことは、母親が父親の違えというよりも、子どもに関わる養育者側の受けとめ方によると考えられる。しかしながら、母親が自分の子どもを育てやすいと認識している(以下「育て易さ感」)。子どもの行動特徴は、「扱いにくさ」得点が低く($r=-.48, p=.04$)、「機嫌」得点が高い($r=.50, p=.05$)傾向にあったが、父親の場合は有意な関連はなかった(表2)。母親は父親よりも多くの時間を子どもに関わっているため、普段から「育て易さ感」あるいは「育てにくさ感」を経験しやすいことが予測される。

2)新生児期、乳児期前期、1歳時の子どもの行動特徴の変化

対象児の1歳時の行動特徴を母親と父親が認知した行動特徴の平均値とし、新生児期、乳児期前期、1歳時の行動特徴の個人内変化をみると、新生児期のNs。評定による「生活リズム」得点が高い子どもは1歳時における「適応性」得点が高く($r=.59, p=-.01$)、また乳児期前期に「生活リズム」得点が高い子どもは、1歳時の「反応性」得点が高かった($r=.54, r=.04$)。しかしながら、ほとんどの行動特徴は一貫しておらず変化していた。成長・発達とともに表出の仕方も多様化すると考えられる。新生児期からの基本的特徴が、環境との相互作用によってどのように変化していくかについては今後継続して調査し明らかにしていく必要がある。

2. 親の育児意識、養育姿勢と育児行動

1)1歳時の親の育児意識、養育姿勢、育児行動

因子分析の結果、以下の6因子が得られ、「肯定的育児観」「育児専念」「育児負担感」「育児支持感」、「積極的関わり」「自立を促す関わり」と命名した(表3)。また育児の受けとめでは「育児は楽しい」あるいは「育児は大変」の項目をとりあげ、「どんな子どもに育てたいか」という養育姿勢については、「何にでも

表1. 新生児期、乳児期前期、1歳時における子どもの行動特徴

子どもの行動特徴	新生児期		乳児期前期		1歳時	
	Ns. 評定	信頼性係数 (α 係数)	母親認知	信頼性係数 (α 係数)	母親認知	信頼性係数 (α 係数)
活気	しっかり吸乳する	0.82	母乳(ミルク)をよく飲む 元気がいい	0.81	だいたい決まった時間にお乳を 欲しがる ウンチをする回数や時間帯はだ いたい決まっている 眠っている時間と目覚めている 時間のリズムは安定している がらがらや人の声など音のする ほうに顔をむける	0.76
	母乳やミルクの飲みはよい 手足を活発に動かす					
生活リズム	睡眠覚醒のリズムは安定 している	0.80	眠っているときほぐつすり 眠っているときほぐつすり	0.83	よく笑しそうに声を出してい る 顔を見るとあやさなくとも笑 いかけてくる この子は私のお話が大好き でよく声を出す 「いないいないばー」をする と声をだして遊ぶ	0.72
	眠っていることが多い					
反応性	がらがらや人の声など音の するほうに顔をむける	0.79	私のことをよくみる 抱っこすると安心する 話しかけるとじっと聞いてい るように感じる 母親だとわかっていると 感じる	0.86	よく笑うときほぐつすり 泣き声は甲高い 泣き声は甲高い	0.79
	人の顔をじっとみつめる					
泣き易さ	目と目がよく合う	0.73	笑顔をよくみせる	0.83	よく泣く ひとりにされるとすぐに泣く ちよつとしたこととすぐに泣く	0.83
	泣き声は甲高い					
泣きの強さ	泣き声は甲高い	0.73	泣き声は甲高い	0.83	何かしているときに大人が手 伝おうとすると嫌がる 母親がそばを離れようとする と泣いたり後追いつする 目撃めたときや服りにつくと きくずる	0.66
	泣き声は甲高い					
扱いにくさ	泣き声は甲高い	0.73	泣き声は甲高い	0.83	髪をとかしたり顔を洗っても らう時嫌嫌よくしている よく機嫌をおこす (逆転項目)	0.61
	泣き声は甲高い					
機嫌よさ	泣き声は甲高い	0.73	泣き声は甲高い	0.83	新しい環境(初めての場所や 音)や刺激(音、人)にすぐ 慣れる よその子とはじめてあった時 はしりこみする(逆転項目)	0.72
	泣き声は甲高い					

表2.1歳時における母親と父親の認知した「育て易さ感」と子どもの行動特徴との相関 (Spearmanの順位相関係数)

子どもの行動特徴	母親による子どもの「育て易さ感」	父親による子どもの「育て易さ感」
生活リズム	0.32	0.46
反応性	0.31	0.38
適応性	0.33	0.12
機嫌よさ	0.50 *	0.23
扱いにくさ	-0.48 *	-0.05

*p<.05

チャレンジする活発な子どもに育てたい」(以下「活発子育て観」)、「ゆっくり、じっくり一つのことをやりとげる子どもに育てたい」(以下「じっくり子育て観」)の2項目とした(表3)。それぞれの有意な関連は図1に示した。母親が「育児は楽しい」と感じる度合

すると考えられる。

2) 新生児期、乳児期前期、1歳時における親の育児への思いの変化

母親への3回の質問紙項目で共通であった「育児は楽しい(み)」「育児は大変だ」と「肯定的育児観」について、図2、3に示すように、母親の育児への受け止めや「肯定的育児観」は、新生児期、乳児期前期、1歳時とも強い相関があり、その傾向は一貫しているといえる。

3. 子どもの行動特徴と親の育児意識、養育姿勢、育児行動の関連

1歳時における子どもの行動特徴のなかで「扱いにくさ」は、父親の養育姿勢で、「じっくり子育て観」

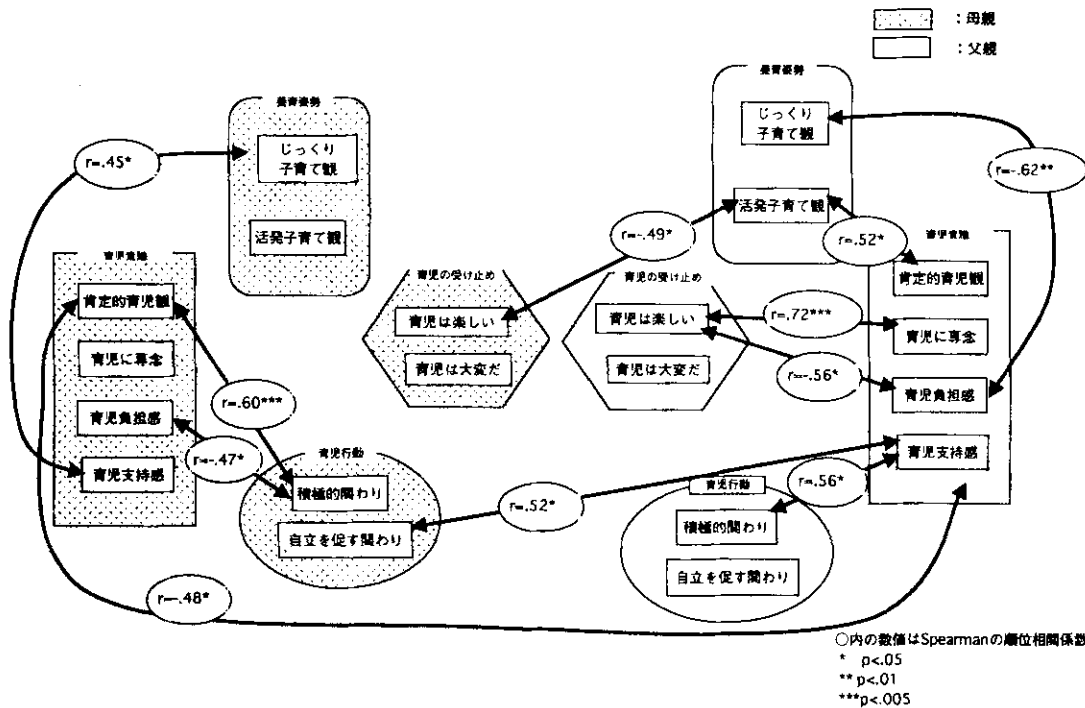


図1. 1歳時における母親、父親の育児への受け止め、育児意識、養育姿勢、育児行動の関連

いは、父親の「活発子育て観」と有意に負に相関していた。一方、父親が「育児は楽しい」と感じる度合いは、母親との関係はみられず、父親自身の育児に対する負担感が少なく、育児への参加を望んでいることが影響していた。また、母親の「肯定的育児観」が強い場合は、父親の育児支持感が低い傾向にあった。さらに、「育児は楽しい」あるいは「育児は大変だ」の感じ方は、両親間で一致していなかった(図2)。同様に、変化しにくいと思われる「肯定的育児観」についても父親と母親間での相関係数が低かった。母親も父親も育児に関して相互に影響を受けているが、育児意識や養育姿勢は必ずしも一致しておらず、そのずれは特に母親が育児を楽しめるかどうかにかつ

つと関係がなかったが、母親の「育児負担感」と正に相関していた($r=.60, p=.009$)。また、「生活リズム」の安定した子どもの父親ほど「育児は楽しい」と答えており($r=.52, p=.03$)、母親もまた父親からの「育児支援感」得点が高い傾向にあった($r=.52, p=.03$)。「反応性」が高い子どもの母親は、より「自立を促す関わり」をすると答えており($r=.47, p=.05$)、父親の育児行動との関連はなかった。

子どもの行動特徴は、親の育児への受け止めや育児意識、養育姿勢、育児行動に影響していたが、その仕方は母親と父親で異なっていた。母親は、子ども

表3. 新生児期、乳児期前期、1歳時における親の育児意識、養育姿勢、養育行動

	新生児期		乳児期前期		1歳時	
	母親	信頼性係数 (α 係数)	母親	信頼性係数 (α 係数)	母親・父親	信頼性係数 (α 係数)
育児経験の受けとめ	育児は楽しい 育児は大変だ		育児は楽しい 育児は大変だ		育児は楽しい 育児は大変だ	
養育姿勢 (どんな子どもに育てたいか)					何にでもチャレンジする活発な子どもに育てたい ゆっくり、じっくり一つのことをやりとげる子どもに育てたい	
肯定的育児観	この子どもならどんな困難にも耐えられる この子は私の生きがい この子にはできる限りの愛情を注ぐ	0.74	この子どもならどんな困難にも耐えられる この子は私の生きがい この子にはできる限りの愛情を注ぐ	0.80	この子は私の生きがい この子にはできる限りの愛情を注ぐ	0.77
育児に専念	できるだけ早く仕事に復帰したい、仕事に専念したい 育児に専念したい	0.80	できるだけ早く仕事に復帰したい、仕事に専念したい 育児に専念したい	0.72	できるだけ早く仕事に復帰したい、仕事に専念したい 育児に専念したい	0.36
育児負担感					育児に専念したい 育児や家事から解放されたいと思う	0.59
育児支持感					育児ノイローゼになる人の気持ちに分かる気がする 育児や家事は夫と分担協力している	0.83
育児行動					育児については何でも夫と話し合っ進めている お子さんによく話しかけている この子が起きているときは話したい ていっしょに楽しんでいようよ よく励ましていてくれる よくほめる方だ	0.75
積極的関わり					お子さんがはじめてすることやひとりでは時間がかかるとかなどは、無理せずに出す時間をかけても、できるだけひとりでやらせる	0.71
自立を促す関わり						

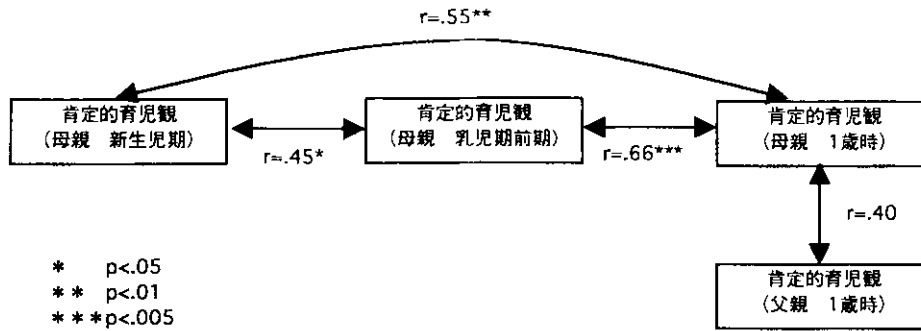


図2. 新生児期、乳児期前期、1歳時における肯定的育児観 (Spearmanの順位相関係数)

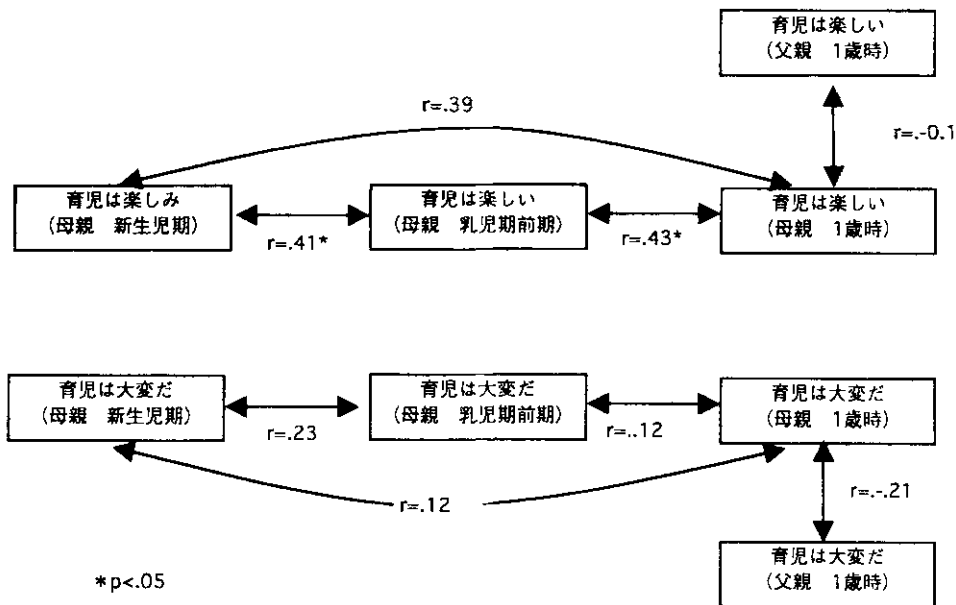


図3. 新生児期、乳児期前期、1歳時における育児への受け止め (Spearmanの順位相関係数)

の行動特徴を育児行動に、父親は養育姿勢や育児のという受けとめに反映させていた。上述した母親の「育児は楽しい」受けとめは、子どもの行動特徴よりも父親の養育姿勢に影響を受けていると考えられる。

■ 総合考察

1歳時における子どもの行動特徴の両親による認知は、「反応性」の特徴以外は一致していた。しかしながら、「育て易さ」の受けとめ方や感じ方は、母親と父親で違っていた。一般に母親は、子どもと関わる時間が比較的長いことが予測され、より「育て易さ感」あるいは「育てにくさ感」を経験し易いと考えられる。また、新生児期、乳児期前期、1歳時の子どもの行動特徴は、ほとんどの特徴が変化していた。ただ、新生児期の看護者による「生活リズム」の評定と1歳

時における新しい環境への「適応性」に相関がみられた。1歳時での行動特徴は、依然身体・生理的側面に依存していることが予測される。

育児を「楽しみ」あるいは「楽しい」と感じている母親は1年後も楽しいと答えていたが、父親とは、有意な相関がみられず、必ずしも一致していない。また、生後1年時の母親と父親の育児意識、養育姿勢、育児行動は必ずしも一致していなかった。特に母親の「肯定的育児観」は、新生児期より一貫性があるが、父親のそれとは一致していなかった。この両親の育児に対する違いが、母親の子育ての喜びや達成感や、家族関係、子どもの人格形成に少なからず影響すると考えられる。

子どもの行動特徴は、父親の場合は育児への受けとめや養育姿勢に、母親の場合は育児行動に反映していることが示唆された。さらに、母親が「育児は楽しい」と感じる度合いは、子どもの行動特徴ではな

く、父親の養育姿勢「活発子育て観」に影響を受けていた。父親の育児支援は子どもを持つ家族にとって不可欠であるが、その有り様はさまざまである。父親が育児に熱心でも一方的であれば、時に母親には重荷になることもある。水野⁸⁾によると、乳児期に世話がしにくく順応性が悪い子どもは、幼児期に活動性が高く順応性が悪く持続性がない子どもになる傾向があり、これらの子どもの母親の育児ストレスは高いという。乳児期の行動特徴は母親の育児ストレスと関連し、それは幼児期の子どもの行動特徴に

反映することが予測されるが、本調査では子どもの行動特徴だけでなく、父親の養育姿勢や育児支援状況が、母親の育児の受けとめに影響する結果となった。したがって、父親の存在が重要となるが、看護者は単に父親の積極的育児参加を求めるだけでなく、母親の育児への受けとめや子どもの行動特徴をふまえた家族全体を合わせて行っていくことが必要と考える。

付記:本調査にご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) Klaus, M. H., & Kennell, J. H.: Parent-Infant Bonding. 2ed. The C. V. Mosby Company, 1985.
(竹内徹, 柏木哲夫, 横尾京子<訳>: クラウスケネル親と子のきずな. 医学書院, 1985).
- 2) 古澤頼雄: 新生児の個体反応性. 心理学評論, 22(1), 1979.
- 3) 古沢頼雄: 発達初期における母子交互性—新生児・乳児の養育者に及ぼす影響を中心に—. 教育心理学研究, 23, 1975.
- 4) Brazelton, T. B., & Nugent, J. K.: Neonatal Behavioral Assessment Scale. 3rd edition. Mac Keith Press, 1995. (穠山富太郎 監訳, 大城昌平・川崎千里・鶴崎俊哉 訳: ブラゼルトン新生児行動評価原著第3版. 医歯薬出版株式会社, 1998.)
- 5) 陳省仁, 吳敬慈: 「泣き」や「ぐずり」と乳児の発達. 三宅和夫(編)乳幼児の人格形成と母子関係. 東京大学出版, p.p.77-94, 1991.
- 6) 上村佳世子: 母子関係と子どもの気質. 田島信元 乳児の気質・母子相互交渉と自己認識形成との関連について. 文部省科学研究費研究成果報告書, 15-25, 1990.
- 7) 竹中和子, 下見千恵, 片山美香, 清水凡生: 幼児期における情緒形成の基礎的研究 平成11年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書1/6, 100-106, 2000
- 8) 水野里恵 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連: 第一子を対象にした乳幼児の縦断的研究. 発達心理学研究, 9(1), 56-65, 1998

親の育児感情と乳幼児の感情認知との関連性について

分担研究者 大日向雅美
(恵泉女学園大学教授)

研究要旨 近年、親による子どもへの虐待事件の増加が伝えられている。虐待に至らないまでも、育児ストレスを高じさせ、苛立ちから子どもの受容に困難を覚える親が急増しており、ゆゆしい現象と考えられる。こうした現象の背景には多様な要因が存在すると考えられるが、その一つに、親の側に乳幼児の状態、とりわけ感情の把握が適切に行われにくいことが考えられる。乳幼児が何を求めているのか、いかなる感情を表現しているのかを乳幼児の表情から適切に読みとれるか否かは、親としての対応のあり方を左右し、それが結果的には子どもとの相互作用を潤滑に行えるか否かにかかわる要因と考えられる。

本研究は乳児の感情をその表情から把握する能力を父母間で比較するとともに、親としての育児感情(育児に対する充実感vs不安感や苛立ち)がどのように影響を及ぼすかについて、併せて検討した。結果は、育児感情の一部に父母間の差異が認められたものの、類似性の方がより顕著であった。一方、乳児の感情認知に関しては、父母間の差異は明らかではなく、むしろ、育児に対する不安や苛立ちの感情が高い場合に、乳児の感情認知が適切に行われず、一部に否定的な傾向が認められた。

■ 研究目的

自己の感情を言葉で十分に伝達できない乳幼児に対しては、養育者がその表情から乳幼児の感情を的確に判断して対応する能力が求められる。通常は乳幼児の感情認知は母親に適性があると考えられているが、一方、父親の感情認知能力との間にどのような差異があるのだろうか。さらには、養育者側が抱えている育児ストレス等の要因は、乳幼児の感情認知にどのような影響を及ぼすのだろうか。

本研究は、育児能力に関する父母間の比較を行う研究の一環として、乳幼児の感情を把握する能力に焦点を当てて父母間の相違を検討すると共に、その背景要因の一つとして、養育者としての育児感情がどのように影響しているかを明らかにしようとしたものである。

■ 研究方法

1. 研究方法

乳幼児をもつ父母を対象に、乳幼児の感情認知検査と育児感情についての調査票調査の2種類を実施した。

<乳幼児の感情認知検査>

乳幼児の感情認知検査は「IFP 日本版(日本I

FEEL Pictures研究会/慶応義塾大学医学部精神神経科):以下JIFPと記す」を用い、調査対象1人に検査者一人がついて、次の要領で個別に実施した。

JIFPは30枚の12ヶ月児たちの表情の写真から構成されている。その写真を1枚ずつ提示し、次のA(自由回答)とB(評定)の2通りの回答を求めた。

A:「この写真の赤ちゃんがあらわしている、一番強くははっきりしている感情・情緒はどんなものでしょうか。あなたの心に最初に浮かんだ言葉をそのまま、回答してください」

B:「それぞれの写真の赤ちゃんがあらわしている感情や情緒が、どれくらい快あるいは不快なものであるかについて、評定してください」(評定は「非常に不快」から「非常に快」までの5段階評定))

検査所用時間は一人あたり約20分であった。

<育児感情についての調査票調査>

育児感情を調べるための調査票調査は、首藤(1998)を参考に作成した。内容的には、親子間の共感経験を尋ねる13項目と、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情を尋ねる33項目から構成されている。この調査票はJIFP検査の終了後に調査票を渡し、自宅で記入して1週間以内に返送してくれるよう依頼を行った。

2. 調査対象

調査は神奈川県横浜市内に所在する保健所の乳児

健診に来所した父母を対象とした。

調査対象有効数は次の通りである。

J I F P S	: 父親 72 名	母親 101 名
育児感情の調査票調査	: 父親 37 名	母親 72 名
(回収率)	(51.4%)	(71.3%)

■ 研究結果

1. 育児感情

<共感 vs 分離>

子どもに対する共感経験を問う 13 項目に対する評定値の結果は表 1 に、育児に対する充実感や不安・苛立ちを問う 33 項目に対する評定値の結果は表 2 に示す通りである。

共感経験については、父母ともに「共有経験」を示す項目群の評定値が高く、「分離経験」を示す項目群の評定値が低い点で共通している。「共有経験」の中でも、項目 7「子どもが悲しそうにしている時、なんとかしてあげたくなかったことがある」、項目 9「子どもの話や表情から子どもの気持ちを感じとろうとしたことがある」、項目 12「子どもにプレゼントを買う時、子どもの喜んだ顔を想像しながら選んだことがある」、項目 13「子どもが喜んで見ている様子を見て、自分までうきうきしてきたことがある」の 4 項目の評定値は父母ともに高い。

父母間で有意差が認められた項目は、項目 1「子どもと気持ちがひとつになっていると感じたことがある」、項目 3「泣いている子どもを見て、自分まで悲しくなってきたことがある」、項目 6「子どもが病気の時、つらそうにしているのを見て、自分までつらい気持ちになったことがある」であり、両項目とも母親の方が父親に比べて有意に高い。他の項目では、父母間に有意差は認められていない。

一方、「分離経験」の項目の評定値は、いずれにおいても「共有経験」項目の評定値よりも低く、この点については父母間で差がない。

<充実感 vs 不安・苛立ち>

次に、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情については、表 2 に示す通り、「充実感」を示す項目に対する評定値が高く、「苛立ちや不安感」を示す項目への評定値が低い傾向にある点では、父母ともに共通している。

父母間で有意差が認められた項目は、項目 1「子どもと遊ぶのが楽しい」、項目 7「自分の子どもが一番かわいい」、項目 12「子どもを見てみると元気づけられる」、項目 22「子どもの中に、自分と似ているところを見つけると、うれしい」において、父親の方が母親よりも評定値が高い。

一方、項目 3「子どもから解放されたい」、項目 8「子どもと接していると、自分の性格がきらいになる」、項目 18「親として自分は不適格だと思う」、項目 21「親になって、自分に自信がもてなくなった」において、母親の方が父親よりも有意に高い評定値を示している。

父親は育児に喜びや充実感を回答する傾向にあるのに比べて、母親は育児に不安や苛立ちを父親よりも強く回答している。その理由として、母親は子どもとの接触時間も長く、細々とした世話に追われ、心理的に余裕をなくしがちなために、子どもと遊ぶことを楽しみとしている父親に比べて、母親の方が育児の負担感を強めていることがうかがえる。

<分離と不安・苛立ちとの関連性>

上記の育児感情のうち、子どもに対する分離感情と育児に対する不安・苛立ちとの間に明らかな相関関係が認められた。以下の項目は有意な相関関係を示したものであり、いずれも父母共通であった。

子どもに対する分離感情／育児に対する不安・苛立ち

表 1 : 2「子どもと言葉やしぐさでやりとりするのがめんどろになったことがある」／表 2 : 9「子どものことがわずらわしくてイライラする」、13「子どもの長所より短所に目がいく」、33「子どもがもっと〇〇だったらいいのに」と思うことがある

表 1 : 4「子どもの気持ちの変化についていけず、子どものことを不思議に感じたことがある」／表 2 : 18「母親(父親)として、自分は不適格だと思う」、21「母親(父親)になって、自分に自信が持てなくなった」

表 1 : 10「子どもがこれはおもしろいと言葉やしぐさで伝えてきても、自分が興味を持てなかったことがある」／表 2 : 「子どものことがわずらわしくてイライラする」

表 1 : 11「子どもが何かを恐がっていた時、その気持ちをわかろうとしても、自分までその怖さを感じなかったことがある」／表 2 : 13「子どもの長所より短所に目がいく」、15「母親(父親)になって、行動が制限されているのが、苦痛だ」、23「しつけの時、どうしたらよいかわからなくなることがある」

2. 乳児の感情認知

・快・不快の評定

写真 1～写真 30 の乳児の表情が示す「快」の程度に関する評定値の結果は、表 3 に示す通りであ

表1 親子関係の共感経験について (平均値、()内は標準偏差)

	父親 (n=37)	母親 (n=72)
共感経験		
1) 子どもと気持ちがひとつになっていると感じたことがある	4.40 (1.01)	4.79 (0.70) *
3) 泣いている子どもを見て、自分まで悲しくなってきたことがある	3.14(1.42)	3.66 (1.18) *
5) 子どもを叱ったあと、 子どもがどんな気持ちになったか想像したことがある	3.66 (1.80)	4.31 (1.43) *
6) 子どもが病気の時、つらそうにしているのを見て、 自分までつらい気持ちになったことがある	4.26(1.68)	4.77 (1.35)
7) 子どもが悲しそうにしている時、なんとかして あげたくなったことがある	5.33 (0.72)	5.24 (0.73)
9) 子どもの話や表情から、子どもの気持ちを感じとろうとたことがある	5.36 (0.76)	5.14 (1.20)
12) 子どもにプレゼントを買う時、子どもが 喜んだ顔を想像しながら選んだことがある	5.08(1.56)	5.01 (1.47)
13) 子どもの喜んでいる様子を見て、自分までうきうきしてきたことがある	5.66 (0.67)	5.67 (0.48)
分離経験		
2) 子どもと言葉やしぐさでやりとりするのが、 めんどろになったことがある	2.89 (1.32)	3.15 (1.24)
4) 子どもの気持ちの変化についていけず、子どもの ことを不思議に感じたことがある	2.89 (1.37)	2.58 (1.36)
8) 子どもが泣いていた時、その気持ちをわかろうとしたが、 なぜ泣くほどに悲しいのか理解ができなかったことがある	3.77 (1.33)	3.38 (1.29)
10) 子どもがこれはおもしろいと言葉やしぐさで伝えてきても、 自分は興味を持てなかったことがある	2.58 (1.40)	2.46 (1.42)
11) 子どもが何かを恐がっていた時、その気持ちをわかろうと しても、自分までその怖さを感じなかったことがある	3.19 (1.53)	3.09 (1.43)

表2 育児感情に関する評定値（平均値、()内は標準偏差）

	父親 (n=37)	母親 (n=72)
(充実感)		
1) 子どもと遊ぶのが楽しい	3.83(0.37)	3.59(0.62)*
2) 子どもの成長する様子をはほえましく思う	4.00(0.00)	3.94(0.23)
5) 子どもと接していると、何ともいえない充実感を感じる	3.50(0.65)	3.46(0.58)
6) 子育てを通して、自分が成長していると感じる	3.05(0.88)	3.25(0.80)
7) 自分の子どもが一番かわいい	3.95(0.33)	3.74(0.58)*
10) 親になれてよかったと思う	3.92(0.28)	3.76(0.49)
11) 親としての自分が好き	3.32(0.78)	3.07(0.81)
12) 子どもを見ていると元気づけられる	3.86(0.35)	3.57(0.65)*
15) 親になり気持ちに張りができた	3.51(0.61)	3.22(0.77)*
17) 親として行動しているときに、自分らしい	2.89(0.81)	2.75(0.87)
19) 自分ではなくてはならない存在だと思うようになった	3.48(0.61)	3.35(0.86)
20) 親になって、他人に寛大になった	2.65(0.79)	2.74(0.82)
22) 子どもの中に自分と似ているところを見つけると、嬉しい	3.65(0.59)	3.19(0.86)*
24) 子どもの興味や関心を広げてやりたいと思う	3.92(0.28)	3.90(0.34)
27) 親になって、物事に積極的に取り組むようになった	2.35(0.75)	2.57(0.89)
30) 子どもの成長発達がよくわかった	3.41(0.80)	3.42(0.75)
31) 弱い立場の人に思いやりをもつようになった	2.92(0.92)	3.21(0.71)
(苛立ち・不安)		
3) 子どもから解放されたい	2.27(0.77)	2.71(0.78)*
4) 子どもの相手をすると疲れてくる	2.46(0.69)	2.71(0.68)
8) 子どもと接していると、自分の性格がきらいになる	1.57(0.83)	1.94(0.89)*
9) 子どものことがわずらわしくてイライラする	1.76(0.76)	2.01(0.90)
13) 子どもの長所より短所が目につく	1.76(0.80)	1.88(0.79)
14) 子育てを負担に感じる	1.86(0.82)	2.10(0.81)
16) 親になって、行動が制限されているのが苦痛	1.95(0.85)	2.57(0.85)
18) 親として自分は不適格だと思う	1.48(0.56)	2.07(0.76)*
21) 親になって、自分に自信がもてなくなった	1.38(0.59)	1.85(0.74)*
23) しつけのとき、どうしたらよいかわからなくなる	2.53(0.77)	2.51(0.86)
25) 子どもには親が決めたとおりにさせたい	1.38(0.55)	1.53(0.63)
26) 他児に比べて、うちの子は育てにくいと思うことがある	1.51(0.73)	1.79(0.91)
28) 自分の関心が子どもに集中して、視野が狭くなった	1.73(0.87)	1.94(0.77)
29) できることなら、子どものことは妻にまかせたいと思う (できることなら、子育てをだれかに代わってもらいたい)	1.68(0.71)	1.42(0.71)
32) 子どもと何となく気が合わないと感じることがある	1.57(0.73)	1.60(0.76)
33) 「子どもがもっと○○だったらいいのに」と思うことがある	1.43(0.73)	1.65(0.84)

表3 JIFPの「快・不快」の評定値

	父親	母親
写真1 (喜び)	4. 17	4. 03
写真2 (悲哀)	1. 21	1. 30
写真3 (注意・疑問・驚き)	3. 13	3. 11
写真4 (喜び)	3. 92	3. 86
写真5 (ねむい)	4. 04	3. 86
写真6 (欲求)	2. 25	2. 46
写真7 (喜び)	4. 00	4. 05
写真8 (注意・喜び・驚き)	3. 25	3. 08
写真9 (注意・喜び・驚き)	3. 25	3. 16
写真10 (注意・喜び・驚き)	2. 58	2. 76
写真11 (怒り)	2. 38	2. 35
写真12 (注意・喜び・驚き)	2. 33	2. 54
写真13 (注意・疑問・驚き)	2. 75	2. 86
写真14 (ねむい)	3. 58	3. 46
写真15 (注意・疑問・驚き)	2. 75	3. 08*
写真16 (悲哀)	1. 71	1. 73
写真17 (怒り)	1. 79	1. 92
写真18 (注意・疑問・驚き)	3. 29	3. 51
写真19 (悲哀)	1. 33	1. 19
写真20 (注意・疑問・驚き)	2. 83	3. 03
写真21 (喜び)	3. 88	3. 97
写真22 (喜び)	4. 63	4. 51
写真23 (注意・疑問・驚き)	3. 17	3. 24
写真24 (喜び)	4. 79	4. 89
写真25 (ねむい)	3. 33	2. 89*
写真26 (疲れ)	3. 08	2. 97
写真27 (喜び)	3. 54	4. 16
写真28 (怒り)	1. 96	2. 08
写真29 (悲哀)	2. 75	3. 05
写真30 (疲れ)	2. 88	2. 65

にくいという結果が示されている。

3. 育児感情と乳児の感情認知との関連性について

育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情と乳児の感情認知との関連性をみる。具体的には、育児に対する充実感や不安・苛立ちの感情を尋ねる33項目の因子分析から確認された2因子(「充実感」「不安・苛立ち」)の各因子得点を四分位点によって、high群、low群に分け、「充実感」の高い群と、「不安・苛立ち感」の高い群を抽出し、JIFPの自由回答結果を比較した。高充実群：父親9名、母親25名/高不安・苛立ち群群：父親9名、母親26名) ずつである。

高充実群も高不安・苛立ち群も、乳児の感情認知の回答は、JIFPマニュアルに示されている各写真が示す乳児の感情として最もポピュラーな回答とほぼ一致した回答が示されたが、とくに顕著な差として以下の事項が認められた。

まず、高不安・苛立ち群は回答に際して、「わからない」「うーん」と言って回答を躊躇する人、その一方で、類似した写真にはほとんど時間をかけずに同じ言葉を繰り返すような回答をする傾向がより多く認められたことである。この点は高充実感群が、類似した写真に対しても、一枚一枚、言葉を換えて回答している人が多く見られたこと、あるいは、判定が難しい写真の場合には、子どもの言葉で(「ママ、何してるのかな?」「いたずらしたいよお」など)表現を試みていた)ことと対照的である。

また高不安・苛立ち群は、乳児の感情を実際の年齢よりも高く、ややもすると意図的な解釈を加えていると思われる回答も散見され、この点は高充実群にはみられない傾向である。すなわち、写真2(イライラ、欲求を満たされないでふてくされている)、写真9(何か思案中)、写真12(ぶ然、今はかまわないで)、写真17(ぶ然)、写真22(ナルシストな感じ)、写真23(クールな感じ)、写真26(人を見下している)、写真28(むかつく、ふてぶてしい)等である。

る。30枚の写真の中で、評定値に父母間で有意差が認められたものは、2枚(写真15と25)のみである。JIFP実施マニュアルによると、写真15は「注意・疑問・驚き」(具体的には、観察している・関心・きょとん・疑惑・けげん・好奇心・真剣・夢中・じっと見ている・何だろう・熱中・びっくり・すごい)等の回答が、また写真25は「ねむい」の回答が多く寄せられる写真としてカテゴリー化されている。写真15は母親の方が、写真25は父親の方が「快」と判定する結果が得られている。しかし、他の28枚では、乳児の感情の「快・不快」の評定に父母間の差は認められない。むしろ、「喜び」の表情は「快」として、「悲哀」「怒り」の表情は「不快」として、父母ともに明確に認知されている。一方、「注意・疑問・驚き」の表情に関しては、評定値が中間値を示しており、「快・不快」の判定が行われ

■ おわりに

乳幼児をもつ父母を対象に、育児感情に関する調査票調査および乳児の感情認知に関する検査を実施し、両者の関連性と父母間の比較について分析を行った。その結果、父母間の相違よりも、育児に対して充実感を抱いているか、あるいは不安や苛立ちの感情を抱いているか否かの方が、親として子どもに対して抱く共感あるいは分離の感情により大きく影響していることが明らかであった。そして、それは写真判定による乳児の感情認知にも

影響していること、すなわち、育児感情に不安や苛立ちを所持している親においては、父母のいずれも乳児の感情認知に際して、積極性や適切性に欠ける傾向が認められた。

親の育児感情と子どもの感情把握のあり方との間に本研究が示したような関連性が見いだされたことは、子どもを適切に受容していくためにも親が安定した心理状態で育児にあたれるような支援策の必要性を示すものであろう。そのためにも本研究の結果をより具体的な育児行動の場面でさらに検証していく必要があると考える。

参考文献

- 首藤敏元「思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究」平成10年度厚生科学研究報告書(第1/6) 13～143, 1998
日本版 I FEEL Pictures 実施マニュアル 1998年版

幼児期の自己制御機能の発達

—父親と母親が幼児の自己制御・思いやり・攻撃性の形成にどのような影響を与えるか—

分担研究者 森 下 正 康

(和歌山大学教育学部教授)

研究要旨 今日のいじめや不登校、学級崩壊などの問題行動の背景に、自己制御機能の発達や思いやり、攻撃性の問題が関与していると考えられる。これまで子どもに対する母親の影響について検討してきた。今回は、主として父親の態度がどのような影響を与えるか、さらに父親の態度と母親の態度の組合せパターンが子どもの自己制御機能等の発達にどのような影響を与えるかを検討した。和歌山県下の市部と郡部の計5つの幼稚園と保育園から3, 4, 5歳児を対象に、担任教師と母親、父親に評定を求めた。子どもについては、自己抑制、自己主張、思いやり、攻撃性の4特性に関して担任教師に評定を求め、養育態度については、受容、統制、矛盾、実権について、母親父親それぞれに自己評定を求めた。すべてのデータがそろった489名について分析した。

主要な結果は次の通りであった。(1) 男子について、母親が愛情豊かな場合あるいは父親が愛情豊かで子どもの自律性を尊重する場合、男子に思いやりが形成される。女子について、愛情豊かで統制がゆるやかな父親の場合は自己抑制が発達する。それに対して、冷たくて厳しい母親の場合は女子の自己抑制が育たず攻撃性が高くなる。また、冷たくて厳しい父親の場合は女子の思いやりが育たず攻撃性が高くなる可能性がある。(2) 母父の態度パターンについてまとめると次のようになる。両親の暖かい受容的な態度は子どもの自己抑制の発達にとって重要である。それに対して、両親の冷たく拒否的な態度は子どもの攻撃性を高める。(3) 両親共に統制がゆるやかな場合、女子の自己抑制の発達にプラスの影響を与えるが、男子の自己主張の発達にマイナスの影響を与える。また、母親だけが厳しく統制的な場合は子どもに高い攻撃性を形成させる。(4) 両親共に矛盾しない一貫した態度をもっている場合は、男子の自己抑制や自己主張の発達にプラスの影響を与える。(5) 自己主張は、男子の場合は父親が、女子の場合は母親が子育ての実権を持っている方が発達する。両親が実権を持っている場合には、男子の自己制御や思いやりの発達に対してマイナスの影響を与える可能性がある。

■ 研究目的

今日社会問題となっているいじめや不登校、学級崩壊などの問題行動の背景に、自己制御機能の発達や思いやり、攻撃性の問題が関与していると考えられる。そこで、子どもの自己制御機能の発達に対して親の養育態度がどのような影響を与えるかについて、これまで母親の影響について検討してきた。その結果次の点が明らかとなった。

年中児の場合、母親の受容的態度が男子の自己主張を育て、母親の誘導スタイルが女子の自己抑制と自己主張の両方を育てる可能性がある。それに対して、年長児の場合、母親の統制的態度や力中心スタイルが男子の自己抑制機能の発達を阻害する。また、女子に対しては、母親の力中心スタイルが自己主張機能を高め、さらに、母親の統制的態度が自己主張だけが高く自己抑制の低い子どもを育てる可能性がある。以上の結果は、先の親子関係と家庭での子どもの特徴との関連とは異なっていた。

先の研究でも指摘してきたように、子どもの発達にとって父親の影響は重要である。したがって、家庭のなかでの子どもに対する母親と父親の役割、その機能が子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えているかを明らかにすることが、残された重要な課題であった。

したがって、今回は主として父親の態度が子どもにどのような影響を与えるか、さらに父親の態度と母親の態度の組合せパターンが子どもの自己制御機能の発達や、思いやり、攻撃性の形成にどのような影響を与えるかを検討したい。

ここでは、担任、父親、母親のデータの組合せを問題にする必要があるため、多量のデータを必要とする。そこで研究対象となる園の数を増やし、できるだけ多様な地域の子どもたちが対象となるように配慮した。したがって、すでに分析してきたことではあるが、多量のデータを用いて、自己抑制と自己主張の発達が思いやり、攻撃性と相互にどのように関連するかについて確認したいと考える。

■ 研究方法

1. 調査対象と手続き

和歌山県下の4つの幼稚園(岩出町・有田市・湯浅町・田辺市)と1つの保育園(和歌山市)、計759名の幼児が研究の対象となった。一人ひとりの子どもについて、各園児の担任に対して園でのようすをもとに評定を求めた。また、同時にその子どもの母親と父親に対して、家庭での子どものようすについて評定を求め、さらに子どもに対する自分の養育態度について、自己評定を求めた。

その結果、担任教師・母親・父親のすべてのデータがそろったのは489組であった。その内訳を表1に示す。

2. 用いられた尺度

子どもの特性について、自己抑制・自己主張・攻撃性についてはこれまでの研究と同じ項目を用いた。思いやりに関しては小嶋ほか(1988)の養護性研究と森下(1985)の研究をもとに作成した。担任による評定には、前回よりきめの細かい評定を

表1 分析の対象者数

	男児	女児	計
年少児	93	90	183
年中児	83	90	173
年長児	63	70	133
計	239	250	489

表2 子どもの自己抑制と自己主張を測定するための質問紙(担任用)

担任用	お願い					
	「ふだんの子どもの様子について、ありのままにつけてください」					
	クラス(年長・年中・年少)	組	番			
	子どもの名前	(男・女)	(歳	ヶ月)	
	当てはまる(数字)に○をしてください。					
						非常 に そう だ
						か な り そ う だ
						や や そ う だ
						ち が う
1.	先生や友だちの話をおわりまで、しっかり聞く。	-----	3	2	1	0
2.	いやなことは、はっきり「いや」という。	-----	3	2	1	0
3.	ほしいこと、欲しいものははっきり大人にたのむ。	-----	3	2	1	0
4.	あそんでいるとき、きちんとルールを守る。	-----	3	2	1	0
5.	ちょっと、失敗したりうまくいかない、すぐにあきらめる。	-----	3	2	1	0
6.	ほかの人と意見がちがっていても、自分の意見をいう。	-----	3	2	1	0
7.	友だちにいじわるされたり、いやなことをいわれたとき「やめて」という。	-----	3	2	1	0
8.	あそんでいるとき、ずるいことをした子に「だめ」という。	-----	3	2	1	0
9.	「してはいけない」といわれたことは、しない。	-----	3	2	1	0
10.	あそびのとき、自分の順番がくるまで待てる。	-----	3	2	1	0
11.	ひどいわる口をいわれたり、からかわれたとき怒る。	-----	3	2	1	0
12.	自分の思ったことを、みんなのまえでなかなか口に出していけない。	-----	3	2	1	0
13.	けがをしたり、すこしぐらい血がでたりしても泣かない。	-----	3	2	1	0
14.	人のものをかかってにさわったり、使ったりしない。	-----	3	2	1	0
15.	自分の席に座っている子にのいてほしいとき、「のいて」という。	-----	3	2	1	0
16.	自分の使いたいあそび道具を、かわりばんこに使える。	-----	3	2	1	0
17.	自分の番に、だれかがわりこんできたとき「順番をぬかさないう」という	-----	3	2	1	0
18.	時間がかかっても、最後までがんばる	-----	3	2	1	0
19.	すすんで手をあげて、発表する。	-----	3	2	1	0
20.	人が話しているとき、退屈するとよそ見をしたり手あそびをする。	-----	3	2	1	0
21.	ほしいものがすぐ手に入らなくても、がまんできる。	-----	3	2	1	0
22.	はいりたいあそびに、自分から「いれて」という。	-----	3	2	1	0
23.	やりたくないことでも、やらないといけなときはやる。	-----	3	2	1	0
24.	自分のものをとられたとき「かえして」という。	-----	3	2	1	0
25.	おもしろくなくても、おわりまでだまって人の話を聞く。	-----	3	2	1	0
26.	「あとにしてください」といわれれば、待てる。	-----	3	2	1	0
27.	いやなことをいわれたりされたりしたとき、泣いたり黙ってしまったりする	-----	3	2	1	0
28.	むずかしいことでも、あきらめずにやる。	-----	3	2	1	0
29.	人に聞かれたら、はきはきこたえる。	-----	3	2	1	0

表3 子どもの思いやりと攻撃性を測定するための質問紙 (担任用)

当てはまるところに○をしてください。

	0: ぜんぜんない	1: たまにある (1ヶ月に1回以下)	2: ときどきある (1ヶ月に何回か)	3: よくある (1週間に何回か)	4: 非常によくある (ほぼ毎日のように)		
			非常によくある	よくある	ときどきある	たまにある	ぜんぜんない
(例) 朝起きたら、すぐに顔を洗う	-----	4	③	2	1	0	
1 友だちの世話をする	-----	4	3	2	1	0	
2 生き物をかわいがる	-----	4	3	2	1	0	
3 友だちとけんかをする	-----	4	3	2	1	0	
4 言葉づかいがあらう	-----	4	3	2	1	0	
5 いうことをきかない	-----	4	3	2	1	0	
6 友だちが困っていたら助ける	-----	4	3	2	1	0	
7 友だちが悲しんでいたるとき、なぐさめる	---	4	3	2	1	0	
8 年下の子の面倒をみる	-----	4	3	2	1	0	
9 すぐ暴力をふるう	-----	4	3	2	1	0	
10 友だちをつねったり叩いたりする	-----	4	3	2	1	0	
11 植物の世話をする	-----	4	3	2	1	0	
12 物を乱暴にあつかう	-----	4	3	2	1	0	
13 友だちを励ましたり応援したりする	-----	4	3	2	1	0	
14 気に入らないことがあると暴れる	-----	4	3	2	1	0	
15 自分の使っているおもちゃを他の子にかしてあげる	-----	4	3	2	1	0	
16 自分より小さい子どもをいじめる	-----	4	3	2	1	0	

(つけ落としがないかどうか、見直してください)

求めて、自己抑制と自己主張に関しては4件法(非常にそうだ・かなりそうだ・ややそうだ・ちがう)、思いやりと攻撃性に関しては5件法(非常によくある・よくある・ときどきある・たまにある・ない)に変更した。質問紙を表2、3に、尺度の項目番号を表4、5に示す。自己抑制、自己主張尺度の項目数は、因子分析の結果に基づいて、前回とは一部減らしている。

表4 自己抑制と自己主張の項目

自己抑制 (14項目)

(1) 欲求不満耐性 (我慢できる)

1・9・14・20・25

(2) 遅延可能性 (まてる)

4・10・16・21・26

(3) 根気 (最後までがんばる)

5*・18・23・28

自己主張 (自己表現) (13項目)

(1) 正当な要求

2・7・8・11・15・17・24

(2) 自主性 (能動性)

3・6・12*・19・22・29

(注) * 逆転項目

親の養育態度については、小嶋ほか(1988)の作成した受容尺度(10項目)、統制尺度(10項目)、実権尺度の一部(5項目)と、鈴木ほか(1985)の作成した矛盾尺度の一部(5項目)を用いた。尺度の内容は次の通りである。

尺度の内容は次の通りである。

【子どもの特性】

1) 自己抑制

この特性には、「つらくても我慢する」「今すぐでなくても待つことができる」「やりだしたら最後までがんばる」という三つの特徴が含まれている。得点が高いほど、欲求不満に耐える力・待つ力・根気が強いことを示す。

2) 自己主張

ここでいう自己主張は、よい意味での自己主張で自己表現力といいかえてもいいものである。その中には、大きく二つの特徴がふくまれおり、ひと

表5 思いやりと攻撃性の尺度項目

思いやり (8項目)

1・2・6・7・8・11・13・15

攻撃性 (8項目)

3・4・5・9・10・12・14・16